



十九世紀イギリス小説のsettingについて(その二)

著者	太田 藤一郎
雑誌名	人文學
号	71
ページ	50-70
発行年	1964-03-20
権利	同志社大学人文学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000002535

十九世紀イギリス小説の Setting について (その二)

The Setting of the English Novels
in the Nineteenth Century (2)

太 田 藤 一 郎

イギリス19世紀の時代の悲劇小説は、作中人物によって抱かれた理想も、環境のうけ入れるところとならないで次第に崩壊し、人物は幻滅の淵に立たされ生命を失ってしまう、というような型をとる。この場合、環境が作中人物の意思に大きな影響力を持ち、人物の行動を支配し、拘束することが明かである。Thomas Hardy の見解によると、人間の行動を拘束する力を二つに分類している、即ち人間の性質そのものから生ずるところの内的なものと、環境から否応なしに押しつけられるところの外的なものである。前者は *The Mayor of Casterbridge* (1886) の中の主人公 Michael Henchard 自身の性格から生じる力である。作者の Hardy 自身この小説を ‘novels of character and environment’ と呼ぶ作品の中に入れている。Egdon Heath のもつ力は勿論、外的なものである。Egdon Heath は自然の不滅の力を象徴している。この力にたいして、人間はとるに足らない非力でもって、無益な戦いをいどんでいるにすぎない。自然をうけ入れ、自然の中に生きようとする人間だけが生き残るのである。華やかな都会生活を希望し、自然に逆って生きようとする情熱的な享楽主義的な女 Eustacia Vye は、彼女自身の上に、また彼女の周囲の人々の上にも破滅をもたらす。このように Hardy は環境を単なる背景的な目的に用い

るというのではなく、深い目的を与えて使用している。人間を打ち負かし服従屈服させるのは Egdon の荒野なのである。彼はこのように自然の場合を用いているが、その基礎になっているのは進化論のような科学知識なのである。作中の人物はこの自然的背景から現われ出る。自然に生き、自然の一部となって生活していく農民や原始的な男女が、彼の悲劇に暗黙のうちに魅力を与えている。彼等はその表面に人間性の美しい要素を浮べている。Thomas Hardy の作品の人物は自然の場面から生れ出るのであるが、それと同じように plot も自然の場面から生れ出る。W. M. Thackeray の作品においては、社会構造がその背景となっているが、Hardy の作品の場合にも自然の場面が統一された背景を与えている。Hardy は若い頃から Wessex の農民や、中流階級の種々の生活から多くの材料を蓄えてきた。自然という背景の要素が作品の中に浸入し、作品の plot や登場人物を動かしていく点においては、彼の *The Return of the Native* という悲劇小説と、Emily Brontë (1818~48) の *Wuthering Heights* (1847) という悲劇的な小説とは、何か共通的なものが存在する。

人間生活を拘束し、悲劇に導く悲劇的な situation が作品の劇的な結末を促していく、即ち plot と作中人物との間には何の間隙もなく、作品のあらゆる構成要素と人物とが固く結びついて、そして人物の動きを決定し除々に変化させて、やがて終局に持っていくところの悲劇的な小説として、イギリス小説の中から挙げられる優れた作品の一つとして、*Wuthering Heights* が考察の対象となるだろう。内気で、強情で、荒涼たる自然を愛し、30歳の若さで死んだと言われる Emily Brontë の唯一の作品が、この *Wuthering Heights* という悲恋物語である。嵐ヶ丘に建っている Earnshaw 家の主人 Mr. Earnshaw はある時所用のため Liverpool に行き、浮浪児を拾って帰ってくる。その男の子を Heathcliff と名付け、家族の一員として我が子 Hindley, Catherine と同じように育てる。Hindley は Heathcliff に強い反感を覚える。機会があれば Heathcliff をいじめる。

しかし Catherine は Heathcliff と協力して暴君的な兄に反抗するのである。そのうち Earnshaw 夫妻が死亡すると、Hindley の横暴ぶりは公然と遠慮なく Heathcliff の上に、そして彼をかばう妹 Catherine の上にまで加えられる。Heathcliff は粗野、片意地、無教育であり、Hindley は父の死により都会の学校を中退して、妻 Frances を伴って帰るや、暴君ぶりを発揮し、深酒のために次第に品性を下落させ、益々狂暴になっていく。Heathcliff と Catherine は言葉に現わしては言わないけれども、心中お互に深く愛し合っている。二人は生きる自由を確保し、兄 Hindley の虐待に反抗していくためには、力を合していかなければならないことを痛感している。しかしある日曜日のこと、近くの地主 Linton 家の犬に足を咬まれて負傷した Catherine は、Linton 家でしばらくの間傷の養生を許される。その結果富裕な Linton 家で Catherine が身につけたものは、今まで彼女の心の中でねむっていた華やかな生活をあこがれる虚栄心の目覚めであった。彼女は彼女の心の秘密を女中 Nelly に打明けるのであるが、それははからずも Heathcliff も聞いてしまった。彼は嵐ヶ丘から姿を消してしまう。彼を求めて Catherine は狂気のようなげき悲しむのであるが、やがて Linton 家の長男 Edgar と結婚してしまう。3年間行方をくらましていた Heathcliff は大金を持った立派な紳士となって姿を現わす。彼は自分を虐待した Hindley に、自分を裏切った Catherine に、自分から Catherine を奪った Edgar にたいして復讐をしようとする。その目的遂行のためには、人間性を失って冷酷無残な復讐の鬼と化してしまう。又妻を失って自暴自棄になっている Hindley をしてますます身を持ちくずさせる。Edgar の妹 Isabella を誘惑して妻となし、彼女を虐待するとともに、兄 Edgar を苦しめ、Catherine には嫉妬心を起させ、彼をとりまく周囲の人々の平和をじりじりと破壊する。こういう精神的な緊張と圧迫とに抗し切れなくなって、Catherine の精神は次第に異常を来たし始める。人妻である彼女は、愛と憎しみの激しい感情に苦悩する Heathcliff

に抱かれ、余命いくばくもない彼女と、彼女を独りで死の旅路に立たせることの辛さに切齒する彼ではあったが、それでも二人は互に許そうともせず、ある瞬間には愛し合い、ある瞬間には激しく憎み合い、攻め合う言葉をなげつけながら、激しく接吻を交わしてしまう。そして彼女は早産児を生んで間もなく死んでしまう。彼女の死後、彼は彼女の墓をあばいて彼女の姿を今一目見たいほどにも、彼の彼女にたいする愛は激情的なものであった。彼の復讐の気持はまだやすまらない。Isabella は男児 Linton を生み、その子が12歳になった頃彼女も病死する。そして Hindley も、Edgar も現世の人でなくなってしまうと、Heathcliff は Linton 家の財産を自分の手中におさめる目的をはたすために、病弱なわが子 Linton と故 Catherine の娘 Catherine とを無理に結婚させるが、皮肉にも Linton は若くして死んでしまう。彼の復讐には何んとなしの苦悩の影がただよい、遂には Heathcliff も故 Catherine の幻影にあこがれ、寝食を忘れて恍惚とした精神状態におち入り死んでいく。

この作品は、復讐の鬼と化した冷酷な Heathcliff が、かつて自分を虐待した人を、自分を裏切った人々を、無情に攻めつくしていくところの激しい異常な愛憎の世界を、嵐ヶ丘という荒野を舞台にして描いたものである。人物は遠い土地に住んでいる人達ではない。この作品の背景となる Yorkshire に住んでいる人達である。Romanticism と Realism とが互に巧みに結合し、読者の空想を拡大させてくれるところの異常な悲恋物語である。さてこの物語の環境としての嵐ヶ丘については、作者は作品の最初の数章を背景描写に割りあてている。そしてそこで強烈な精神を秘めた荒野の姿を詳細に示している。

“Wuthering” being a significant provincial adjective, descriptive of the atmospheric tumult to which its station is exposed in stormy weather. Pure, bracing ventilation they must have up there at all times, indeed;.....(13)

嵐ヶ丘は常に大気の激動している、嵐の中に吹きさらされている丘である。

この激しい生命に躍動する粗野な嵐ヶ丘の生命をうけて生れた Hindley は、粗野で、狂暴な暴君であり、Catherine は激情的で、片意地で、常に戸外の自然の中での活動によるこびを発見している。この原野に、この兄妹と一緒に育った Heathcliff も粗野で、頑固で、無教育で、Catherine と同じように自然児である。Catherine と Heathcliff は Hindley の虐待にたいして協力して抵抗し、生きる自由を求めようとしている。二人は共通の場に立って、互に共感を抱いている。Catherine の性格は、

“I was only going to say that heaven did not seem to be my home; and I broke my heart with weeping to come back to earth; and the angels were so angry that they flung me out into the middle of the heath on the top of Wuthering Heights; where I woke sobbing for joy.” (14)

と彼女自身が女中 Nelly に打明けているように、天国よりはこの地上に よろこびを見る。嵐ヶ丘の精神を持ったところのものである。その彼女が、彼女の性格とは正反対の富裕な家庭の美男子 Edgar の出現により、彼女の心はとらえられ、虚栄心が芽生え、なやみがはじまる。彼女は二人の男性にたいする愛情に煩悶している。Edgar にたいする彼女の愛情と、Heathcliff にたいする彼女の愛情とを比較分析してみると、

“My love for Linton is like the foliage in the woods: time will change it, I'm well aware, as winter changes the trees. My love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath: a source of little visible delight, but necessary. Nelly, I *am* Heathcliff! He's always, always in my mind: not as a pleasure, any more than I am always a pleasure to myself, but as my own being.” (15)

このように Catherine は告白している。彼女にとっては、Heathcliff への愛情は、見る目をたのしませるものではないが、岩のようなもので、不変であり、必要なものである。Edgar への愛情は、森の樹の葉のようなもので、見る目にはきれいであるが、時間が経てば変化する。これによって、彼女と Heathcliff とを結びつけている愛情が、どういう性質のものであるかということが明瞭になると思う。それを正確に示すことは容易なこと

ではない。それは元来性的な関係ではない。また、彼女の臨終において、Heathcliff 自身も次のように絶叫している。

“I cannot live without my life, I cannot live without my soul!” (16)

このように、Catherine の告白と、Heathcliff の叫びから、われわれが与えられるものは、二人の心を互に惹きつけ合っていたものは、性の意識ではないということである。それよりも更に深い同一感である。この同一感覚は、Catherine と Heathcliff とが Hindley に対して持った反抗精神、行動において作り出されている。Liverpool のスラム街から拾い上げられた浮浪児 Heathcliff は、Mr. Earnshaw の死後、当主になった Hindley によって虐待され、忽ち家族の一員から農奴の地位におとされ、家庭教師による勉強も禁止され、その代りに屋外での労働が課せられた。

“Hindley is a detestable substitute — his conduct to Heathcliff is atrocious — Heathcliff and I are going to rebel — we took our initiatory step this evening.” (17)

こう言って、Catherine は兄にたいして反抗を決意している。この二人の反抗は完全に具体的なものにされる。二人が調理台の下に押し込められて、信心ぶった偽善者である Joseph の監視の下に、魂の平安を求めて祈禱書を無理に読まされていたとき、Hindley と彼の妻は暖炉のそばに楽しく語り合いつつ坐っていた。この不合理な条件にたいして、二人は反抗したのである。二人は読まされていた宗教書を犬小屋の中に投げ込んでしまった。驚いた Joseph の註進をうけて、暖炉のそばの楽園から急ぎやってきた Hindley によって、一人は襟首を、一人は腕をひつつかまれて、裏手の台所にほり込まれた。この反抗において、二人はお互にそれぞれ必要な存在であることに気がついた。浮浪児であった Heathcliff が、自分に人間的な理解と友愛とを与えてくれる、恐怖を知らない熱烈な少女である Catherine に頼るようになったのは当然である。また嵐ヶ丘に生れた Catherine は、十分な人間性を達成し、人間として自己に真実であるためには、彼女

は Earnshaw 家にみなぎっている暴虐にたいして、反抗しようとする Heathcliff と全面的に力を合して、行動しなければならぬと感じたのである。この反抗が Heathcliff に読者の同情をひきよせる。彼は人間性の側に立っていることがわかる。彼は積極的で、意識して反抗している。この反抗を契機として、ここに二人の特別な関係が生じている。けれども、Edgar の富に心をうごかされた Catherine は、

“Nelly, I see now, you think me a selfish wretch; but did it never strike you that if Heathcliff and I married, we should be beggars? whereas, if I marry Linton, I can aid Heathcliff to rise, and place him out of my brother's power.” (18)

Nelly に苦しい言訳をして、Heathcliff を裏切って、Edgar と結婚し、そしてこの二人の男性を生かすことが出来る、と彼女は自らの心をごまかしている。Heathcliff を拒否した彼女のこの行為は、実は彼女の生命を失う行為、即ち彼女は死をえらんでしまったということに他ならない。彼女自身もそれに気が付いている。彼女の心の中に斗争が起るのである。Heathcliff が再び嵐ヶ丘に帰ってきたとき、Edgar は彼をよるこんで迎えたがらないが、妻の Catherine は狂喜する。そして Heathcliff と Catherine とは、愛し合いながらも、互に神経をふみにじり、狂気のように互を破壊しようとする。彼が側に居ると、彼女は Linton 家にたいする何の幻想も持つことが出来ない。この二人は Linton 家の価値を軽蔑する場合だけお互に結ばれている。彼女は自分の墓場は教会の屋根の下の Linton 家の人達の間にはなくて、荒野の中にあるのです、と言って、夫の Edgar を困まらす。

“..... but they can't keep me from my narrow home out yonder: my resting-place, where I'm bound before spring is over! There it is: not among the Lintons, mind, under the chapel-roof, but in the open air, with a head-stone;.....” (19)

戸外、自然、荒野——こういう環境、即ち地上的な性格を象徴する嵐ヶ丘

の原野は、天国的な性格を象徴する Linton 家の世界と対照をなしている。Catherine は、自分の死後に、自分の生命の母体ともいべき嵐ヶ丘の大地に復帰することを熱望しているが、これは Catherine が嵐ヶ丘の生命の顕現であり、この環境から分離することの不可能であることを示すものである。

この作品のクライマックスは、Heathcliff にたいして、凄惨にもえさかる愛と憎しみとの強烈な感情に心狂った Catherine の最後の瞬間である。彼は彼女にたいする愛と憎しみのはげしい激情にかられながら、彼女を抱きしめ、唇を交わす。彼女は最後に Heathcliff を拒否して、結婚の誓が擁護されるか、それとも真の愛情が勝利を占めるであろうか、という最後の舞台である。考えてみると、人の死に直面した場合、過去の感情のもつれとか、怒りとか、一切の悶着は、水に流されて解決されるという位にまで、死というものは神秘性をもっているものであるけれども、この二人の場合には全く違うのである。死に瀕している Catherine を抱いている Heathcliff は冷酷である。安易ななぐさめの言葉の代わりに、彼は彼女が今迄なしてきた行為を分析し、残酷に彼女に次の言葉をあびせるのである。

“You teach me now how cruel you’ve been — cruel and false. *Why* did you despise me? *Why* did you betray your own heart Cathy? I have not one word of comfort. You deserve this. You have killed yourself. Yes, you may kiss me, and cry: and wring out my kisses and tears: they’ll blight you — they’ll damn you. You loved me — then what *right* had you to leave me? I have not broken your heart — *you* have broken it; and in breaking it you have broken mine.” (20)

この言葉はあらゆる文学作品の中でも、最も苛酷な言葉であるが、それと同時に最も人の心を動かす言葉でもある。この複雑な入り組んだ二人の関係をやわらげるような、何かの手段が仮りに講ぜられるとしても、それは全く不適當なことであり、また価値のないことでもあらうと思われる。何物も彼女を死から救うことが出来ない、ということを知っ

ている。なぐさめにも、和解にも、何等の希望もないのである。何かそういう弱いことは、この二人の価値を下げ、二人の生死を台なしにすることになるだろう、というのは、Linton 家の墓地や、教会の慰めを拒否する Catherine と Heathcliff は、二人の関係が死よりも更に重要なものであることを知っている。この物語のうち、Catherine が死んだ後の部分は、Heathcliff の感情がわれわれ一般人にとって理解し難い性質のものであるので、特異なそしてむつかしい部分となっている。そこにおいては、すべての正常な健康な人間感情が拒否されている。彼は次のように叫ぶ。

“I have no pity! I have no pity! The more the worms writhe, the more I yearn to crush out their entrails! It is a moral teething; and I grind with greater energy, in proportion to the increase of pain.” (21)

彼は monster (人非人) になる。彼の妻 Isabella や、Hareton, Cathy, Hindley など、彼の周囲の人々にたいする行為は、残酷で、非人間的であり、正常な考えを超越している。これらの人々にたいする攻撃の武器は、金銭と戦略的な結婚とである。彼は金銭でもって、Hindley の権利を買収し、彼を飲んだくれの不能者にしてしまったし、Isabella と結婚して自分の息子 Linton と Edgar の娘 Catherine との結婚を計かる。その結果、Earnshaw 家と Linton 家の全財産は、Heathcliff によって占められてしまう。彼は組織的に Hindley の息子 Hareton を屈従させてしまう。けれども彼が如何なる行動をとろうとも、われわれは相変わらず、彼にたいして同情を感じる。これは Emily Brontë の芸術の成功である。かつて迫害を加えた人々にたいして、Heathcliff がなしてきた行為に、われわれは本能的に同情をもつのである。彼は非人間的であるけれども、何故彼が非人間的であらねばならなかったかという理由がわかるのである。彼の行為を是認するのではなく、理解することが出来るのである。

この作品において、Heathcliff の恐ろしい反抗の悲劇的な恐怖にたいして、Linton 家の Thrushcross Grange の世界は、人の心を惹く満足そ

うな天国であるように見える。丁度、Charles Dickens の *Oliver Twist* の中に描かれている Brownlow 老人の邸と、盗賊 Fagin の巢窟とが、対照をなしているように、この作品においても、Thrushcross Grange と *Wuthering Heights* とが対照をなして描かれている。Catherine と Heathcliff とを結びつける感情は、生き生きと伝えられているが、互の内部に自己の姿をつかもうとする二つの魂の苦悶の感情である。人間が死よりもむしろ生をえらぼうとする場合、彼の内部の要求、希望を破壊しようとするあらゆるものにたいして抵抗し、そして更に人間的になろうとすることは、人間のやむを得ない表現である。Catherine はこの深い人間的な必然性に順応して、Heathcliff と力を合して反抗するのであるが、Edgar と結婚したことによって、彼女は彼女自身の人間性を裏切ってしまう。人間性を求めた Heathcliff も金銭を手段として、彼の圧迫者たちに復讐しようとしたために、彼は自らの人間性を裏切ることになる。嵐ヶ丘の精とみなされている Catherine の結婚は、彼女自身の人間性を裏切ることになったとともに、結婚により嵐ヶ丘からの脱出を意味する。これは Thomas Hardy の *The Return of the Native* の Eustacia の場合と類似していると言えよう。嵐ヶ丘からの脱出は彼女にとっては死を意味する。彼女は自らの死によって、再び嵐ヶ丘に復帰没入することが出来たのである。即ち嵐ヶ丘は、彼女が魂の平安を得るためには、彼女の死を要求しているということが読者に明かに看取される。このように環境は、作中人物と同じように、個性をもって作中に現われるようになる、即ち環境的要素は作中人物に微妙な働きかけをしていることがわかる。

Catherine の死は、この作品の中程のところで起る、即ちこの作品のやまは彼女の死のところに置かれている。それから後の部分は、復讐を計画実行していく Heathcliff の苦悶の世界の描写になっていて、18年間続くことになる。その間において、彼の復讐の対象になっている Hindley は大酒のため死亡し、Isabella も Edgar も結核症で死亡する。生命ある者

は次々に滅びていく。後に残されたのは、娘 Catherine, Hareton, Linton, そして Heathcliff 自身である。過去において、Heathcliff と Edgar との間で Catherine をめぐっての争いが起ったが、この作品の後半においては、年頃に成長した彼等の子供たち、即ち Linton と Hareton との間で娘 Catherine の争奪戦が奇しくも展開するのである。母親 Catherine の性格を受けついでなのか、娘 Catherine も激情的で、片意地であり、Hareton は粗野で、片意地で、無教育な自然児である。皮肉なことに、Linton は Linton 家の血を受けついでであろうか、Heathcliff の子でありながら Edgar に似て虚弱である。Catherine, Hareton の容貌、特に眼差しが死んだ Catherine に似ているために、Heathcliff をくるしめる。娘 Catherine の性格は、heath の丘に生きるよろこびを感じる娘である。彼女についての作者の描写によると、十月のある午後のことであろうか、或いは十一月の初めのことであろうか、すがすがしい雨模様の午後のこと、芝生も径も湿った枯葉でさらさら鳴り、冷たい青空が雲で半ばおおわれ、今にも大雨になりそうな空模様のときでも、女中の Nelly が彼女に散歩を思いとどまるように頼んでも、彼女は聞き入れなかったのである。(22) また彼女は、半ば根をむき出しにして、殆んど倒れそうになっている檜の幹によじのぼって、枝の間に坐って、地上二十呎の高さで、ぶらぶらやってみてよろこんでいる。(23) Nelly が

“Winter is not here yet. There’s a little flower up yonder, the last bud from the multitude of bluebells that clouded those turf steps in July with a lilac mist. Will you clamber up, and pluck it to show to paper?” (24)

このように、土のくぼみに一輪咲きのこって、ふるえている釣鐘草の花を摘んで、病床のお父さんに見せてあげなさい、と Catherine にすすめてはみた。Catherine はその花をじっと長い間みつめていたが、

“No, I’ll not touch it; but it looks melancholy, does it not, Ellen?”
(25)

と答えて、彼女は荒野に咲きのこる一輪の花の悲しみを感じ取っているのである。そして彼女にとっては、荒野の生命を宿している可憐な花の生命を奪いとるに堪えられないのである。

.....a golden afternoon of August: every breath from the hills so full of life, that it seemed whoever respired it, though dying, might revive.

Catherine's face was just like the landscape— shadows and sunshine flitting over it in rapid succession; but the shadows rested longer, and the sunshine was more transient;..... (26)

これは父 Edgar の病気が次第に重くなっていくときの、 心中にうれいをたたえた Catherine の自然と融合した姿なのである。次に Linton の性格と Catherine の性格との相違をたぐってみよう。

He said the pleasantest manner of spending a hot July day was lying from morning till evening on a bank of heath in the middle of the moors, with the bees humming dreamily about among the bloom, and the larks singing high up overhead, and the blue sky and bright sun shining steadily and cloudlessly. That was his most perfect idea of heaven's happiness: mine was rocking in a rustling green tree, with a west wind blowing, and bright white clouds flitting rapidly above; and not only larks, but throstles, and blackbirds, and linnets, and cuckoos pouring out music on every side, and the moors seen at a distance, broken into cool dusky dells; but close by great swells of long grass undulating in waves to the breeze; and woods and sounding water, and the whole world awake and wild with joy. He wanted all to lie in an ecstasy of peace; I wanted all to sparkle and dance in a glorious jubilee. (27)

Linton が自然の中から求めるものは、完全な天国のような幸福であって、すべてのものが平和の喜びに浸って、うっとりとして横たわっているのが好きである。これに反して、Catherine が自然の中から求めるものは、風の動き、雲の動き、緑の樹々のそよぎ、野鳥のさえざり、荒野の眺め、水の流れ、——万物が大観喜の中に光り輝き、躍り出している姿が好きなのである。Linton の世界は静寂を意味し、反嵐ヶ丘的である。Catherine の

世界は躍動を象徴し、そしてそれは激動する嵐ヶ丘の世界である。ここにも二人の性格が異質のものであることが示されている。反嵐ヶ丘的であるが故に、Linton は嵐ヶ丘に永くとどまることは出来ないのである。Linton の天国は半ば死んだようなものである、と Catherine はきめつけている。ここにわれわれは性格的要素と環境とが、渾然と一体となって創造せられる situation の中に包まれて、嵐ヶ丘に生き残る Catherine の強力な生命と、それとは反対に、嵐ヶ丘に吸収されていく異質的な Linton の薄命のはかなさを見とどけることが出来る。彼女は無教育な、粗野な Hareton を軽蔑していたけれども、Linton の病死後には、彼女は自然児ともみなされる Hareton と結びつくように運命づけられる。何故なら、Hareton こそは、粗野で、非文明的であったと同時に、健康でたくましく、嵐ヶ丘の生命の具象化であったが故である。故 Catherine, Heathcliff の結合は実現しなかったけれども、その娘 Catherine と Heathcliff の変身とも考えられる Hareton との結婚が予想されるに至る。

事件を中心にした行動小説では、作中人物は plot の一部として仕組まれている。また性格中心の性格小説では、plot は作中人物を入れる単なる枠組となっている。しかし、*The Mill on the Floss* や、*The Return of the Native* や、*Wuthering Heights* などのような劇的小説においては、性格的要素と環境とが渾然と一体となって創造せられる situation に重大な意味を発見するのである。劇的小説では、plot と作中人物が密接に結びつき、作中人物と plot との間の間隙は消滅する。作中人物のある性質が全体の動きを決定していくとともに、動きの方が作中人物を除々に変化させていく。そして全てが終局へと押し進められていく。こういうことは、行動小説や性格小説には発見することの出来ない特徴であろう。したがって性格小説は喜劇とつながりを持つが劇的小説は詩的悲劇とつながりを持つと言えるであろう。たとえば、*Wuthering Heights* にしても、Herman

Melville (1819~91) の名作 *Moby-Dick, or the White Whale* (1851) ——(Moby-Dick と呼ばれる巨大な白鯨に、片脚をかみとられた Ahab 船長は、復讐の念にかられ、白鯨を求めて航海を続ける。遂に宿敵を発見した船長と白鯨との間に、3日間の戦が交わされ船長は白鯨の巨体にモリを打ち込む。しかし、船長も船員たちも、船もろとも大海に呑み込まれて、沈んでしまうのである。生存者は Ishmael 青年ただ一人である。この作品は雄大な海の叙事詩ともいうべきものである。) ——にしても、最も強烈な場面の対話は殆んど詩の表現と区別し難い。人妻ではあるけれども、Catherine にとっては Heathcliff は同心同体ともいうべき生命体である。彼が Isabella によって誘惑されると、激しい嫉妬心からかれ、彼を独占したいと願う。私はどんなに苦しんでもよいから、あなたは幸であるようにと、自己を犠牲にしたり、否定したりすることは、真の愛情ではない。二人ともに苦しむのが当然で、同心同体であって、はじめて愛は完全に実現される。自己を犠牲にすることは、愛の美化、即ちロマンティックな逃避にすぎない。真の愛情は、愛する者を独占することである。こういう場合には、人間は誰でも利己主義になる。こういうことが、Catherine の性格から生れた直覚である。この激しい感情でもって、愛する Heathcliff を攻め立て、苦しめつづける。

“I wish I could hold,” she continued bitterly, “till we were both dead! I shouldn’t care what you suffered. I care nothing for your sufferings. Why shouldn’t *you* suffer? I do.”

“Don’t torture me till I am as mad as yourself,” cried he, wrenching his head free, and grinding his teeth. (28)

愛と憎しきは紙一重、表裏というがこのあたりの対話から、愛情と憎しみの焔に身をやく二人が、愛していればこそ、攻めつけあい、いためつけ合わずにはいられない、心中の苦悶を書きつづった対話、

“You teach me now how cruel you’ve been — cruel and false. *Why* did you despise me?

に至る部分は、まさに散文体で書かれた詩とも言うべきものである。これは不幸なる愛する者の心の底から出た叫びであり、悲しみと強烈さではりさけるような対話である。感情の激動と行動の激動はその極に達し、そしてこの激動の後に静寂がおとづれる。作品の中に見られる動きの強烈さ、これが劇的小説の本質的な特徴の一つなのである。Thomas Hardy の作品の中心をなすものは何であるか。切迫感が変化しつつ終局に向って発展していくことではなかろうか。劇的小説では、作中人物の性格と全体の動きとの間の照応は全く本質的なものであって、そこには何等の間隙もなく、作中人物の性格は状況の変化に応じて変化していく。また作中人物の性格は状況を変化させて、作中の一切の変化は、状況と作中人物、この両者の内部にひそんでいる何かの要素から生じる。こういう点で、plot と作中人物との間に何らの間隙もない。plot が内容自体のうちに溶け込んでいる劇的小説は、plot と作中人物との間に間隙の認められる行動小説、性格小説とはちがうのである。人間の意思を支配し、人間の生き方を変えていく環境の力や強大な Immanent Will をみとめた Thomas Hardy の作品においては、事件が処理される場合、因果関係が強調され、plot が基礎となり、人物は plot の要求にしたがうように要求される。したがって、作中人物はさまざまなわなに巻き込まれ、縛られてしまう。そこに絶えず強調されるのは運命である。

劇的小説の人物は、環境の中にまきこまれないように、縛られないようにと、常に環境との戦いを続けるのであるが、そこに性格の発展があり、進行がある。しかし、その発展、進行もやがて究極にはわなに縛られ、環境の中に運命的な消滅を遂げていく。環境もまたそれを求めていることを見逃すことは出来ない。この性格の発展、進行から運命的な消滅への推移の間に、異常な緊張感が生れる。このように劇的な作中人物には緊張感が存在し、劇的な人物の存在そのもののうちに、すでに時間の問題がふくまれている。即ち時間的経過によって、Catherine Earnshaw の本質は明ら

かにされ、時間は彼女が自己を展開していく要素となり、彼女の究極の運命を成就するのである。劇的小説の終局は一切の動きの終局を意味し、事件を進行させてきた問題を解決させ、性格描写もそこで完成する。多くの作中人物には、死が、或いは一時的な休息が訪れるのである。背景的要素の空間という要因については、劇的小説にあっては、動きの領域を一点に集中し、悲劇的効果を高めるという建前から、事件の展開する空間は必然的に限定される。Jane Austen (1775~1817) の *Pride and Prejudice* (1796~97) は劇的な小説であるけれども、悲劇的な調子がさけられている。悲劇的な破局に終わらないで、Bingley と Jane, Darcy と Elizabeth との似合の結婚という結末になっていて、そこには休息が与えられる。しかし、作品全体にみられるものは、狭い情景で、イギリスの田舎の中流の家庭という限定された場面である。Thomas Hardy の作品の Egdon の荒野、Emily Brontë の嵐ヶ丘などは、悲劇的破局のおこる限定された狭い一つの空間である。Herman Melville の *Moby-Dick* の空間は、海が舞台となっている。成程それは広大ではあるが、ある意味では海という他の世界からはかくりされた不変の限定された特殊の舞台にすぎないことがわかるであろう。劇的小説における場面の限定は、如何なる意味を持っているか。もし別の場面があれば、作中人物の感情や行動は特定の限定された場面に縛りつけられて自滅することなしに、感情のはげ口、活路を見出すことが出来るであろう。感情の動きが停止することなく、感情の自由な展開が可能になる。したがってそういう情景の下では、渋滞感も、緊迫感も、悲壮感もおこらない。結局は困難な状況から脱出出来るという安易感がひそんでいる。それに反して、完全に遮断された舞台であればこそ、劇的小説に描かれる闘争が生じ、発展し、そして不可避な結末に至ることが出来る。その場合には、あらゆる出口は閉鎖され、別の場面へ逃れて行く道はない。それ故、人物はそこで自分の運命の至るのを待っているしか方法がないのである。このように場面は限定されている故に、plot も集中的である。

この点についても、劇的小説と性格小説とは対立している。性格小説では、W. M. Thackeray の *Vanity Fair* にみられるように、Becky Sharp, Amelia Sedley, Rawdon Crawley, Geogre Osborn, William Dobbin など、幾人かの中心的人物から出発して、周りの架空の円周へと外へ外へと拡がっていく、そしてそれが社会の姿を現わすのである。作中人物は移り変っていく情景の中を通り、社会の種々の生活にふれながら、自らは大して変ることがない。人物は変化しない。場面が変る。性格小説の plot は外延的である。然るに劇的小説にあっては、二人あるいはそれ以上の人物が、出発点たる円周上のいくつかの点から出発して、その円周の中心へと進んでいく。plot は内向的な性質をおびる。空間は一つの限定された世界であり、事件の進行とともに、その空間は益々狭いものになっていく。人物自身のうちに一つの完結した人生体験の領域が示される。逃れ出る何の出口もない。この閉ざされた変化しない空間の中で、作中人物は互に働きかけ合い、息苦しさを感ず、変化する。このように劇的小説では、plot は集中的であると言える。

劇的小説における時間、空間を更に検討してみると、劇的小説の描く世界は時間と空間のうちにあると言える。空間は初めから定められていて、しかも一つである。性格小説では、時間はあらかじめ仮定され、人物中心の plot が固定し、作品の結末にいたっても、人物の生活はおおむね結婚という形態をとって、今迄の生活にたいして一応の暫定的な中断の形をとる。もし更にその後の生活を描こうとするならば、描く可能性が残されている。劇的小説にあっては、時間中心の plot が組まれていて、作品の結末において、作中人物に訪れる死とともに、時間は尽き果ててしまう。それから後は一切無の世界で何物も存在しない。したがって、発端から終局に達するまでの間に、完結した人の姿が描かれるのである。空間的な背景は、Yorkshire の原野たる嵐ヶ丘、Egdon の荒野、大海原、あるいは何処であろうと差支えない。一定の限定された非文明的な空間、一時の流行

によって変化をうけることのない、永劫不変の大地、原始的な環境であればよい。これらの条件さえ満しているのであれば、他の点は曖昧に規定されていても差支えないであろう。たとえば、嵐ヶ丘から Liverpool が地理的には正確な距離にある必要は少しもない。また London や Paris が Egdon Heath からどれだけ離れていてもよいのである。重要なことは、嵐ヶ丘そのものであり、Egdon Heath そのものである。けれども、拡大する社会のうちに生きている人間を描こうとする性格小説にあっては、どの空間も地理的に正確な場所になければならない。読者は作中人物の動きに相応じて、その背後にある社会を意識しているからである。したがって、*Tom Jones* にしても、*Vanity Fair* にしても、舞台は作中人物の動きにつれて、移動していく。田舎から London への道程、また London から田舎へと移り変る。そしてそのいずれの場所にも同等の比重が置かれている。だから、是等の作品は、旅という手法を使用して、当時のイギリス社会の全景を描いていると言われる理由がここにある。性格小説の環境は、流行に左右される普通の場所であるけれども、劇的小説の環境は、作中人物を縛りつけ、おしつづむ強烈な自然の大地である。時間の点についても、性格小説と劇的小説との間には、時間感覚に相違がある。前者にあっては、時間はのろのろと進む。たとえば、*Vanity Fair* においては、Amelia の卒業とか、彼女と Becky との London への出発とか、彼女たちの結婚とか、戦争のために Brussels への出征とか、夫の戦死とか、Paris での豪華な生活とか、イギリス社交界での活躍とか、多くの事件が起り、しかも発端から結末にかけて、15年以上の時間が経過しているにもかかわらず、作中人物の言動は初めも終りもほとんど変化をみせないで、読者にとっては、時間の経過を実感出来難いのである。ところが、劇的小説においては、時間はまるで飛ぶように過ぎ去る。たとえば、*Wuthering Heights* においては、作品の発端に見る作中人物の言動は、時間の経過とともに急速に変化していく。読者は最初よもや Catherine が Edgar の妻

になるだろうとは予想もしなかったであろうし、また人妻になった彼女が、Heathcliff を抱擁し、自ら進んで彼の接吻をむしり取り、人妻の誓を破るなどとは、想いも及ばなかったであろう。こういう変化をとおして、われわれは Catherine の性格の上に時間の急速な経過があったことを察知出来る。しかし、ここに例外がある。それは *Moby-Dick* の場合であるが、Ahab 船長は時間の影響を受けない。彼は変化しない。時間はのろのろとしか進まない、いやある時には、小説の動きすら一時停止する。求める白鯨への待ちうけが長くつづく。そこには期待と一寸のぼしの危機感が充満し、それが堪え難い空虚さを生み出す。船員たちは澁み切った時間の海の中に朽ちてしまうかに見える程である。全くの静の世界である。嵐の来らんとする前の静けさとも言おうか、やがては運命的な闘争に突入するであろうことが、直観的に予想されるので、ひしひしと緊迫感が無気味によせてくる。白鯨の発見と同時に、忽ち絶対の静の世界は打ちやぶられて、一転動の世界に突入する。この作中人物の生命をかけた運命的な闘争は一瞬にして生じ、生じた以上はこれを避けられない。最も完全な非文明的な海という舞台の上で、船長と白鯨、二つの絶対的な対立した力の闘争は、すべてのものを悲劇的な破滅にひき込むのである。最後の数章で描かれる悲劇的な闘争の描写を効果的にするために、その前に一切の動きが停止した長い静の状態を必要とするのである。

時間の緊迫感は劇的小説の本質的な特徴の一つであり、時間の動きは加速度的に高まる。最初は除々に、やがて終局に向って速度を加える。Catherine と Heathcliff とは将来結婚するのではあるまいかという予感がある。けれども Catherine と Edgar との結婚によって、彼女は幸福な生活に入れそうに感じられる。このあたりから、小説の動きは加速度的に高まっていく。姿を消していた Heathcliff の出現によって、彼女をめぐる二人の男との三角関係は強烈な劇的頂点に突入していくのである。また都会の生活を望む野心を持った情熱的な Eustacia の将来は、果して幸福

になりうるか、不幸がおとづれるのかは未定である。しかし、彼女の前に Clym が出現したことによって、彼女の運命は一つの形をとりはじめる。彼女は年来の望をとげられそうに見える。けれども、Clym が過労のため半盲状態になる頃から、作品の動きは次第に速度を加え、作中人物の期待に反して、Clym の母、Eustacia, Wildeve のおもわくは急速に死につながるっていくのである。小説の動きは、ちょうど流水が流れ流れて、その水量を増し、次第に速度をはやめ、激流となり、遂には瀑布となって急転直下落下するのに似ているであろう。時間の流れは、まるで疾駆するが如くに速かな場合もあり、またある時点までは非常にのろのろと進んで、それから急進するといった場合もあるが、そのいづれの場合にも共通していることは、時間は流れさり、つき果ててしまうということである。性格小説では、時間はある程度無限であって、作品の結末において、その流れは一時停止されているにすぎないのである。その停止点は結婚あるいは休息であって、作中人物の動きにピリオッドを打つところの死ではない。作中人物は時間の影響をうけない。彼等は死におびやかされていない。けれども劇的人物には死がまちうけている。有限の時間、有限の空間に閉じこめられた人物たちのたどっていく悲劇、宿命的に環境にしばられ、それから脱出する機会もなく、その環境の中に没入していかなければならない人達の悲劇、心の中に抱いた理想も、環境に受け入れられないで、時間の流れの中に押し流され、次第に崩壊し、その結果自己の生命すらも失わねばならない窮地に人間を追いつめる悲劇の舞台となった嵐ヶ丘や、Egdon の荒野、そして作中の人物たちに抵抗出来ない、強大な力をもって、彼等を支配し、彼等の運命を左右した嵐ヶ丘や、Egdon の荒野などの環境が、小説の中で持つところの意義はまことに大きい。ここにわれわれは、イギリス19世紀後半の悲劇的小説の中で果した背景的要素の重大な機能を認めざるを得ないのである。

註

- (13) Emily Brontë, *Wuthering Heights* (New York: The Modern Library, 1950), pp. 4-5.
- (14) *ibid.* p. 94.
- (15) *ibid.* p. 97.
- (16) *ibid.* p. 197.
- (17) *ibid.* p. 24.
- (18) *ibid.* p. 96.
- (19) *ibid.* p. 150.
- (20) *ibid.* p. 189.
- (21) *ibid.* p. 179.
- (22) *cf. ibid.* p. 271.
- (23) *cf. ibid.* p. 271.
- (24) *ibid.* p. 272.
- (25) *ibid.* p. 272.
- (26) *ibid.* p. 313.
- (27) *ibid.* pp. 291-292.
- (28) *ibid.* p. 186.
- (29) *cf.* quotation (20)

参考文献

- Walter Allen, *The English Novel*.
- Arnold Kettle, *An Introduction to the English Novel*.
- Edwin Muir, *The Structure of the Novel*.